

離農農家と担い手をつなぐ 農協リース事業で、就農者を支援

JA北オホーツク(興部町)

農家戸数の維持に向け、 JAの支援事業を拡充

JA興部とJAおうむの合併により、平成24年2月に誕生したJA北オホーツク。28年1月現在、生乳を出荷している酪農家は興部地区68戸、雄武地区57戸の計125戸。高齢化や後継者不足などから22年以降は徐々に減少を続け、42年には100戸を切る事が予想されている。

一方、出荷乳量は22年以降、右肩上がりが増加(26年は牧草の不良により減少)しており、同時に1戸当たりの平均出荷量も増えている。同JA営農部の平澤洋史次長は、「これまで離農跡地は、近隣の組合員さんが買い取り、規模を拡大するといったことに対応してきたので、戸数が減少しても、乳量は維持することができました。しかし、将来的なことを考えると、JAとしても積極

的に新規就農者を受け入れることで、生乳出荷戸数の維持を図る必要があると考えています」と話す。このため、JAでは行政や普及センターなどと一体となり、就農者対策に取り組むことになった。

27年度から31年度の農業振興計画(第2次中期計画)では、組合員や新規就農者に向けた支援事業や各種対策が掲げられており、新規就農者を含む雇用の確保対策として、農協リース事業の整備や、担い手住宅の建設が盛り込まれた。そして、今年5月、農協リース事業などを利用して、初めて新規就農したのが、興部町豊野地区の吉田智英さん(25歳)である。

農協リース事業で、 初の新規就農者誕生

吉田さんは同じ豊野地区で酪農を営む博文さん、恵美子さん夫妻の長男だが、実家の牧場は同地区の最も奥部にあり、立地や施設の老朽化などの理由から、後継者としての就農には二の足を踏む部分があったという。吉田さんは、「僕たちの世代はちょうど就職氷河期だったので、就職はせず、実家の牧場で働きながら、草地更新や牛舎の修理などの経営改善を少しずつやっていました。でも、施設も古く、規模拡大も難しい場所な

吉田智英さん(左)の就農を支援したJA北オホーツク営農部の平澤洋史次長(右)



ミルクングバーラーでの搾乳風景

ので、ここでやっていけるんだろうかという不安もありました」と振り返る。一方、平澤次長の元には、「2年ほど前から「28年には離農したいので、乳牛や施設を何とかしてほしい」という酪農家からの要望が届いていた。その酪農家が、今回吉田さんが継承した酒井牧場で、JA管内でトップクラスの乳量と乳質を維持する存在だった。



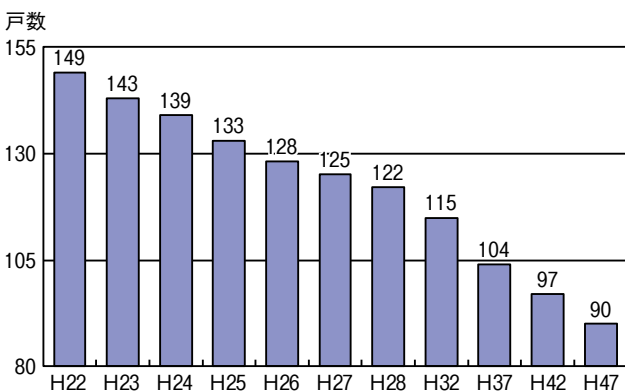
5本のバンカーサイロで、サイレージを作っている

JAが吉田さんのために用意したプランは、牛舎などの施設一式と84頭の乳牛(経産牛65頭、育成牛19頭)および住宅をいったんJAが取得

離農農家の乳牛や施設を5年間のリースで

「当時、興部町には酪農研修生もいなかったですし、吉田さんの存在も知っていたので、JAとして、彼の就農を支援する対策に乗り出しました。吉田家にとっては、後継者を別の牧場で就農させるわけですから、まず、ご両親を説得する必要があります。と思ったのですが、すぐにOKをいただけて安心しました(平澤次長)。

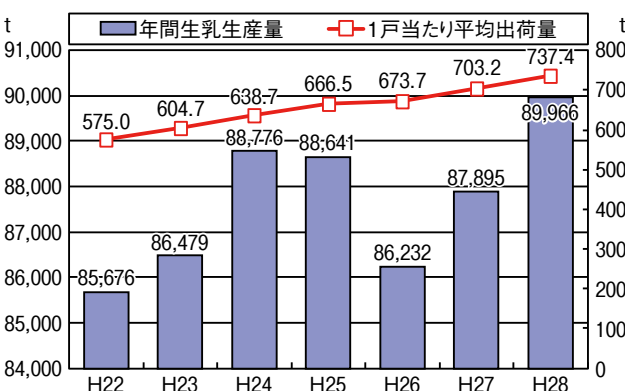
図1 JA北オホーツクの生乳出荷戸数の推移(総戸数)



さらに、JAでは農林水産省が積極的な利用を推進している「畜産・酪農収益力強化整備等特別対策事業(施設整備事業)」の28年度予算に申請するため、興部町畜産振興協議会(永田貢代表)による実施計画書を作成。経産牛と受胎中の乳牛に対し、

し、5年間のリース後、吉田さんに売却するというもの。トラクターやロールベールなどの農業機械は、吉田さんがJAからの融資を受けて、買い取った。また、53・8haの草地は(公財)北海道農業公社の保有合理化事業を利用し、やはり5年間のリース後に吉田さんが買い取ることとした。

図2 JA北オホーツクの出荷乳量の推移(総乳量)



こうしたバックアップを受けて、5月1日から、酪農家の道を歩き始めた吉田さんは、「就農前に半年間、酒井さんの牧場で研修をしたので、スムーズに就農できました。牛舎はリースツールで、乾乳牛から経産牛まで一連の管理作業がしやすいようにレイアウトされていて、ミルク

1頭17万5000〜27万5000円の補助金を利用できた。同協議会は町やJA、生産者、TMRセンターなどによる畜産クラスターと呼ばれる組織。今回の施設整備事業は家畜導入も対象となっており、吉田さんはこの部分でも大きな支援を受けたわけだ。

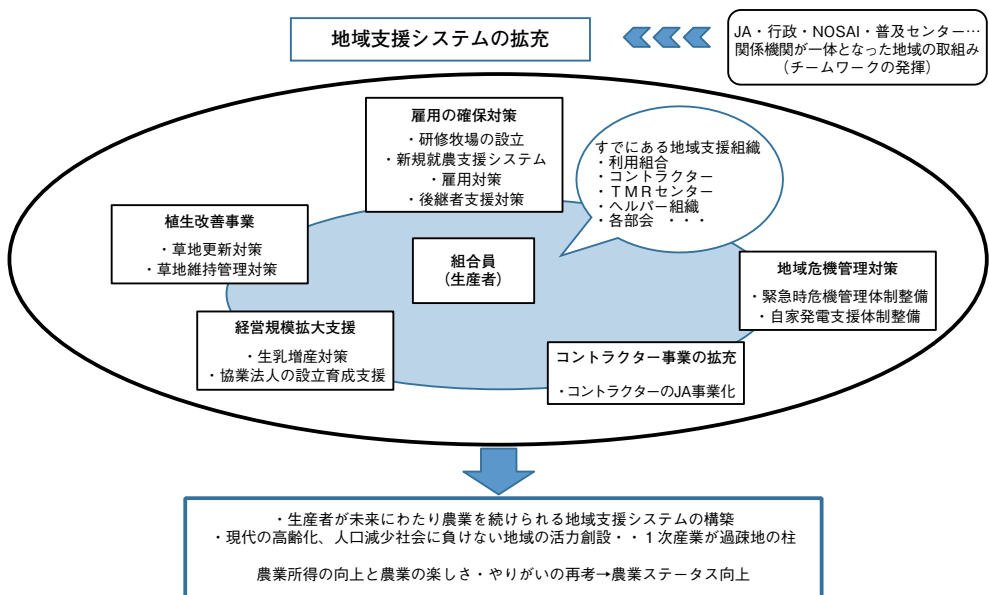


育成舎の掃除をする吉田さん。吉田牧場は高い乳量と乳質を維持している



JA北オホーツクのリース事業を活用して新規就農した吉田智英さん

図3 地域支援システム



「ね」と笑顔で話す。酒井牧場が雇っていた男性従業員も継続して働いているため、吉田さんは乳牛の管理に力を注ぐことができるように、「就農してから5カ月で、廃用になったのは1頭だけ。蹄のトラブルも自分で治療して、牛の健康

持して行ってほしいと思います」とエールを送っている。牧草の収穫はJAのコントラクター事業を活用して、5本のバンカーサイロでサイレージを作り、牧

さまざまな対策を講じ、地域の活力創出を

管理に努めたい」と吉田さん。1頭当たりの平均乳量はJAの平均を上回る1万800kg、乳質も体細胞数が8万/ml未満と優秀で、現在、乳牛は115頭にまで増えている。平澤次長は、「酒井さんは昭和56年に新規就農した方ですが、平成元年ごろから牛舎の増改築を始め、オーリンワン牛舎を自身の力で作り上げました。吉田さんはタイミング良く、この牧場を継承できたので、この乳量と乳質を維持

「フリーライター／梅村敦子」

草ロールは一部販売できるほどの量を確保。泌乳期の乳牛には、デントコーンや加熱大豆などを混ぜた飼料を与えている吉田さんは、「牛がたくさん食べてくれるような飼料を作るのが僕の役目ですが、次は僕のご飯を作ってくれる相手を見つけない」と笑いながら、生き生きと仕事に励んでいる。JAでは吉田さんの事例をきっかけに、新規就農者の受入体制をさらに強化するため、JA内に新規就農部会、研修牧場部会、コントラクター部会、研修牧場部会、コントラクターやフェアへの参加を積極的に進め、北オホーツクでの就農の魅力を進め、北にアピールしていくことにしている。平澤次長は、「JAとしては植生改善事業や地域危機管理対策、生乳増産のための規模拡大支援やコントラクター事業の拡充と合わせて、地域支援のための計画を進め、生産者が未来にわたって、酪農を続けられるシステムを構築していくことで、高齢化や人口減少社会に負けない地域の活力創設を目指していきたいと考えています」と話し、既存の組合員への支援はもちろん、離農農家と新規就農者の橋渡し役としての役割を担っていく方針だ。